

南知多町内海などで、武豊町の富貴にもわずかにみられましたが、すべて消えてしまいました。阿久比谷の条里は、そのなかでは、最も広かったのです。

● 式内社阿久比神社

8世紀の終わりから9世紀の初めにかけて作られた『延喜式』という書物には、2,800を超える神社の名前が書き記されています。ここに名前が挙がっている神社のことを、『延喜式』内にのせられている神社ということで式内社と呼びます。

知多郡では、阿久比神社・入見神社・羽豆神社の3社の名前があります。阿久比神社の場合、現在の阿久比神社ではなく、北原天神がそれだと、植大の権現山から移ってきたものだという説もありますし、昔の神社ならもう少し高い土地にあるのではないかなどと言われたこともあります、移転説にもこれという証拠がなく、土地の高低についても、阿久比谷の水田は、古代にはもっと低かったと思われますので、神社は水田からは見上げるような位置にあったはずです。それよりも、このあたりが弥生後期の遺跡が集まった場所で、その時代から、人々が住んでいたわけです。

また、このあたりの東側の水田が、条里遺構のあったところですから、律令時代にも開けていたはずです。古代の人々の集団は、生産活動だけでなく、信仰によっても結ばれていました。政府がまつるよりも前から、地元の人々が信仰していた土地の神様とそれをまつる神社があったといえます。阿久比神社は、『延喜式』の時代以前から、ずっと同じ場所にあったのではないでしょうか。



阿久比神社

なお、地名は2字表記することになりましたが、神社の名前については特に指示がなかったので、3字のままが続いています。神社の名前が阿久比神社である点から考えると、本来の地名の表し方も、「阿久比」と「阿具比」の両方の文字が使われていたのかも知れません。

■ 第5節 荘園公領制と知多半島

● 荘園公領制と知多半島

平安時代の初めの『和名類聚抄』という資料には、知多郡の郷として番賀・贊代・富具・但馬・英比の5つが挙げられています。

英比郷は、阿久比町域はもちろんのこと、半田市の乙川・亀崎・東浦町の一部などを含んでいたようです。平安時代のなかほどから、各地の有力農民が未開の地を開拓するだけでなく、荒れてしまった田地を再開拓したりして、それを自分の領地とする動きが強まりました。このような有力者を開拓領主といいますが、彼らがやがて地方の武士に成長し田地の開拓を進めるとともに、国衙つまり国の役所の、徴税などを担当する在庁官人と呼ばれる役人を兼ねるようになりました。国衙が管理する公領は、こうして彼らの私領のようになったので、国衙領と呼ばれます。

開拓領主の中には、直接貴族や大きな寺社と結ぶものもありました。自分が支配する土地をこれら有力者に寄進して、自分はその土地を管理する莊官になるのです。このようにできあがったのが、寄進地系莊園です。また、莊官や手工業者、寺社などが、ある目的の費用に充てるために年貢分として与えられた土地を免田といいます。免田もまた、私領化し莊園になっていきます。

全国的にみると、国衙が管理する公領の方が荘園よりも多かったし、どちらも開発領主たちが地域において納税の責任を負っていたので、最近では荘園制といわず荘園公領制と呼ぶようになりました。

知多半島において11世紀に成立したと思われる枳豆志荘と堤田荘が、免田から始まった荘園です。前者は武豊町付近にあった摂関家領ですが、後者は仁和寺領で半田市・常滑市・本町の境目になる半田池のあたりにあたるのではないかと言われています。12世紀に成立したのが、開発・寄進型の野間内海荘と大野荘です。前者は、皇室領ですが、源義朝暗殺で有名な長田忠致が荘官を務めていました。大野荘には、町内の大字草木が含まれていたようです。詳しいことはわかりませんが、皇室領の一つ八条院の荘園です。地元の荘官として大野判官代・八条院官代を名のる朝日頼清がいました。



荘園・国衙領分布略図
(上村喜久子原図)

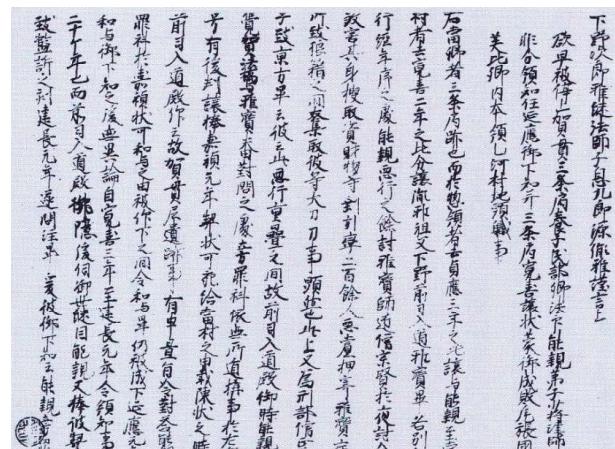
● 国衙領英比郷

町域の西部が、それぞれ違ったすじ道でできた荘園の領域だったのに対して、町域の大半は、英比郷に属していました。英比郷は荘園ではなく、こくかりょう国衙領です。鎌倉時代の貴重な資料が残されています。みなもとのたねまさこんじょうじょう「源胤雅言上状」がそれで、2度目の元寇があった1278～1288年（弘安年間）に書かれたものです。

この資料によれば、13世紀の初めのころ、英比郷を実質的に支配していたのは、賀貫三条局という名前の女性でした。彼女は、英比郷地頭職といって英比郷を管理・支配する立場にありました。同時に一族を率いる惣領でもありました。

その後彼女は、養子にした能親に惣領をゆずったのですが、当時英比郷の一部であった、乙川村（当時は乙河村と書かれています）の管理権については、源雅宝にゆずりました。一種の分割相続を行ったわけです。ところが、能親と雅宝とのあいだに争いが起こりました。一族が、土地に対する支配権をめぐって分裂してしまったのです。もっとも、分割相続以前に起こった承久の乱のとき、能親は上皇側、雅宝は幕府側についたようですから、乙川村地頭職争いは、原因ではなく、対立の結果なのかもしれません。争いは50年も続きました。その結果ははっきりわかりませんが、やがて乙川村は独立したようです。この資料では「英比郷内乙河村」とありますが、100年あまり後に写された知多市如意寺所蔵の『大般若経』奥書には、「知多郡乙河郷万福寺」と「英比郷矢口極楽寺」がならんでいます。

なお、能親は、1245年（寛元3年）、椋岡の平泉寺の阿弥陀如来像を修復したときの「願主」として、仏像の胎内に名前を書き記しています。僧侶ですが、それはこの時代の豪族たちのならわしの一つで、武士でもあったのです。



源胤雅言上状（蓬左文庫蔵『斎民要術』裏書）

■ 第6節 中世の窯業

● 知多半島の古窯

知多半島の丘陵地帯には、たくさんのかつてありました。少なくとも3,000基くらいはあったのではないかと思われます。平安時代の終わりころから室町時代の終わりころまで、知多半島は、たいへん

な窯業地帯だったのです。古窯やその製品は、当時の人々の生活や文化を考えるうえでも、とても大切な史料です。

平安時代の終わりころ、尾張東部の丘陵地帯で焼かれていたし焼き器といわれる陶器の伝統を引き継ぎながら、半島北部で始まった知多の窯業は、鎌倉時代には最盛期を迎える。半島の中央部を中心にして築かれた窯で、大形の甕や壺が大量に作られ、青森から鹿児島まで、全国に運ばれました。最近では伊豆七島や種子島でも見つかっているようです。碗や皿は、主として地元で使われたのでしょうか、粗い作りであること、古窯の周辺では何枚もくつついてしまったり、形がゆがんだり割れたりした不良品がたくさん散らばっているのに出会うこともあって、山茶碗・山皿と言いならわされてきましたが、今は皿・碗と言われています。

窯は、丘陵の砂質のところを、断面が半円形になるように掘り抜いて造られています。火をたくところがいちばん低く、いちばん上の煙出しまで、かなり強く傾斜したトンネルなので、窯窓と呼ばれています。全長は、碗や皿などを専門に焼いた小さなものでも 10 m、甕などを焼いた大きなものでは 20 mにもなります。

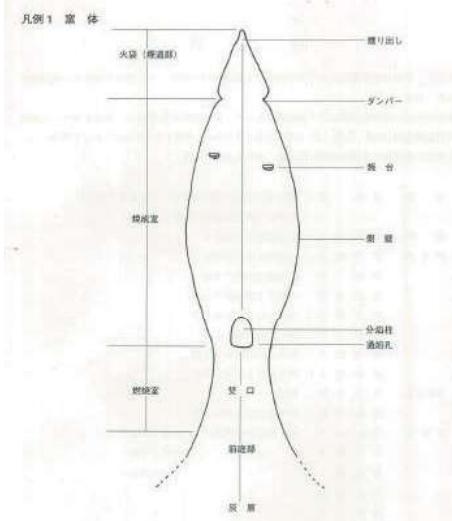
火をたくところは燃焼室と呼ばれています。実際には火を燃すときは、薪をほうりこむ小さな焚口を残して粘土質の土で覆ってしまいます。その奥には両側を炎が通るようにあけて真ん中に分焰柱と呼ばれる柱が立てられています。多くの場合、これは後から立てられたものではなくて最初から掘り残されています。窯内の温度が均一になるようにするための工夫です。その奥が、乾かした半製品を並べて焼き上げる焼成室ですが、傾斜がきついのでそのままでは並べることができません。そこで、上部が平らになるように傾斜の角度にあわせた粘土の台を置きます。これが焼台で、その上に甕や壺ならば 1 個、碗や皿ならば 15 枚くらいを積み重ねて焼き上げます。焼成室の奥が煙道部から煙出しにつながっています。窯を覆っている部分は天井部で、床面から天井部につながっている壁が側壁です。断面をとれば、床は平らで、側壁から天井にかけては半円形ですから、床と側壁の境界ははっきりしますが、どこからが壁でどこまでが天井になるのかは決めることはできないのが普通です。

窯は本体だけでなく、焚き口の前には薪を積み、半製品をならべるなど作業の準備をする前庭部があり、その端は斜面になっていて、灰や炭、製品の破片などが混じって積もっている灰原があります。焼き損じや壊れた製品の破片もその窯の性格を調査する上ではとても大切です。灰原は豊かな情報源なのです。

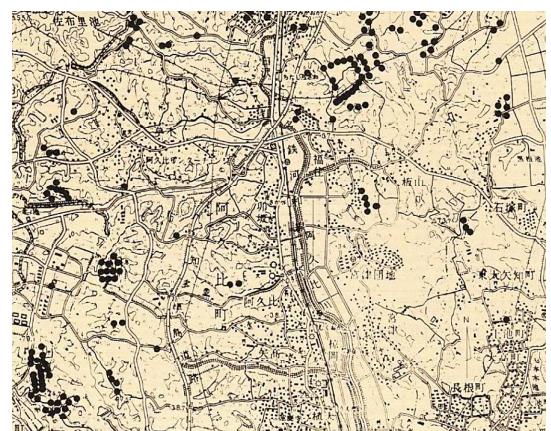
● 阿久比の中世古窯

町内には調査した古窯が 88 基あります。しかし、まだ発掘調査されていないものを別にすれば、板山長根古窯址群の 3 基を除きすべて消滅しています。

まず、東側では、名古屋鉄道河和線巽ヶ丘駅の 1 km ほど東南、東浦町東仙台と本町高根台とにまたがって、未発掘のものや未調査のままに壊されてしまったものを含めると、50 基を超える古窯址群がありました。福住古窯址群・高根台古窯址群・東仙坊古窯址群・丸池山古窯址群などいくつのグループに分けることができますが、全体を広く福住古窯址群と呼んでいます。このうち町内にはいるものは半分くら



窯体平面図



阿久比町の古窯分布図

いですが、この古窯址群が実際に煙を上げていた時代には、このあたり一帯はすべて英比郷にはいっていたものと思われます。碗と皿を中心に焼いていた窯もありますが、大きな甕を焼いていた窯もあります。知多半島のなかでも最も大規模な古窯址群の一つです。

ここから少し南に5基がかたまつた比沙田古窯址群（現ふれあいの森）と、さらにその南東に板山長根古窯址群3基（現知多広域消防指令センター西）があります。前者では、口縁部が大きく開いた甕や巴文と蓮華文の軒丸瓦が発見されています。窯の造り方にも特徴があります。後者は町内ではただ1か所、発掘調査後に保存されている古窯址群で、愛知県の指定文化財になっています。2号窯は窯のなかに碗がつまつたままの状態をみることができます。

板山長根古窯址群の南西800m（現「陽なたの丘」）には町指定文化財の長頸三筋壺が出土した宮津板山古窯址群があります。

西側では、草木の上芳池古窯址群（現「デンソー阿久比製作所」周辺）が目立ちます。9基がかたまつっていましたが、大形の甕をはじめ、三筋壺・長頸壺・短頸壺・注ぎ口をもつ片口碗・片口鉢、薦口と呼ばれる注ぎ口をもつ壺・網につける錘、仏教の儀式で使う火舍など多種・多量に遺物出土しました。窯の造り方もとても珍しいもので、掘り残して作られた分焰柱のほかに、焼成室のなかに4本も5本も柱が並んでいました。

知多半島の中世古窯では、複数の窯内柱をもつものは、2、3の例外が知られているだけで、あとは分焰柱しかありませんから、たいへん貴重なものであります。水場ではないかと思われるものも発見されています。

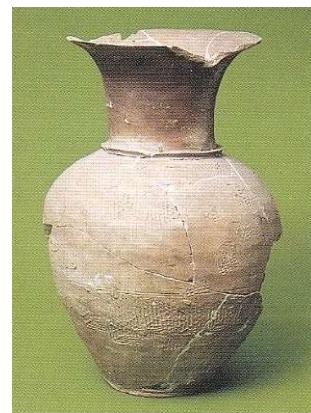
草木地区では、このほかにも6基以上が知られていますし、卯坂地区にも散在しています。ずいぶんたくさん発掘が行われ、いろいろなことが確かめられましたが、調査するたびに新しいことがわかつてきますから、どれも大切な文化財です。

植大地区の一番西側、半田池付近にもたくさんの古窯址があります。このあたりから発見された瓦が、平安京の仁和寺で用いられていたものと同じであることがわかっています。つまり、ここで焼かれた瓦が、平安京の仁和寺まで運ばれて、その屋根をかざったのです。この地域が、仁和寺領堤田荘にはいるのではないかという推定は、ここからも出てきます。

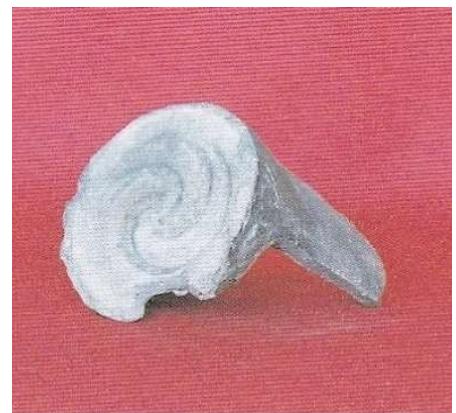
ここから少し東北の櫻池の周りにも、古窯址がかたまっています。正式に調査すれば、大きな成果が得られるのではないかと思われる貴重な古窯址群です。その南側には八ヶ谷古窯址群があり、床面に砂を大量に敷き詰めた床面下施設や窯を築く過程を知る資料となる築窯途中の未完成の窯体があり、窯内や灰原から有耳壺・盤をはじめとする多様な器種



福住古窯出土品・鶴の文様



比沙田古窯出土甕



比沙田古窯出土瓦



宮津板山古窯出土長頸三筋壺



上芳池古窯分焰柱・窯内柱



上芳池古窯出土の火舎



上芳池古窯出土品



八ヶ谷古窯出土品

遺物が出土しています。西側には菅廻間古窯址群、大沢古窯址群、大砂古窯址群が連なっています。知多半島道路阿久比パーキング北には鉢・碗・皿が伏せられた排水施設をそなえる上親田古窯址群があり、その北西には甕が窯詰めの状態で検出された小白根古窯址群があります。

こうしてみてくると、中世の阿久比は、農業も盛んであったに違いありませんが、それ以上に、発達した工業地帯だったといえます。



小白根古窯址群

■ 第7節 室町時代から戦国の世へ

● 英比郷の移り変わり

國衙領だった英比郷の一部は、やがて熱田社領になっていきます。熱田社領だということは、熱田大宮司の力がおよんでいるということです。平安時代の終わりに尾張氏からその地位を引き継いだ藤原氏は、頼朝の母親の家筋にあたりますが、時には朝廷側についたりして、浮き沈みがあったようです。しかし、熱田をよりどころとして知多に強い影響力をもち続けたことは間違いません。

英比郷の一部が熱田社領であることを示す最初の資料は、1316年（正和5年）の「熱田社領目録写」です。そこには、英比南方郷と書かれています。後の資料には、北方が国衙領だとありますから、ほかの荘園や国衙領の位置などを考えて、板山・福住・白沢あたりが国衙領、阿久比川の西側と横松・萩・宮津あたりが熱田社領だったのではないかと思われます。前にもふれたように、草木は大野荘です。半田池付近は堤田荘だった可能性があります。それぞれの支配地を分割した後も、国衙と熱田社とは互いに相手の土地へ侵入したり、年貢を横どりしたりするなどの争いを続けています。そのうちに、京都にある醍醐寺の長官が尾張国衙領を手に入れ、神仏混合の時代なので、熱田社の責任者も兼ねることになりました。これで両方うまくおさまったかというと、今度は地元の武士たちが、どちらにも年貢を納めないという事態になりました。都の貴族や寺院の力が、しだいに地方におよばなくなり、地方の武士たちが力をつける時代が近づいていました。一方では、知多半島には尾張守護だけではなく、三河守護だった一色氏が手をのばし、その支配下におくようになります。尾張のなかでも、知多はほかの地域とは異なり、



熱田社（宮津）

三河や伊勢とのつながりが強かったです。

中世の英比郷が最後に姿をみせるのは、1452年（宝徳4年）のことです。その時には上皇の領地になっています。それ以後、ひらがなで「あぐい」と書かれることが多くなり、また、かつての英比郷の中に含まれていたそれぞれの村の名前が、表面に出てきます。

● 戦国時代の阿久比

戦国時代の阿久比について考える手がかりの一つが、「虫供養」であり「英比丸（磨）伝説」です。伝説をそのまま歴史の事実として受け入れることはできませんが、伝説の背景にある歴史を考えることは重要です。虫供養はおそらく、伝統的な農業民俗と室町から戦国期の武士たちの供養とが結びついたものと思われます。この地域の中世末の「ムラ」のつながりも推定されます。

英比丸伝説にはいくつかの説がありますが、菅原道真の子か孫にあたる英比丸という名前の賢い幼子が、やがてこの地の領主になるというもので、国守との和歌のやりとりなど、興味深い中身をもっていますが、時代の点を含めて、歴史学的には事実と認められるわけにいきません。しかし、中世の武士たちの状況や、中世末ころに栄えた天神信仰や連歌など、阿久比の歴史文化を反映した伝説と思われますから、地元に2つの系統の伝承があること、廻り地頭の伝説にかかわりがあることを含め、大切に伝承しながら研究を続けるようにしたいものです。

戦国期の阿久比を代表するのが、久松氏です。菅原氏の一族を名のり、坂部城に本拠を置きました。古い時代のことははっきりしない点もありますが、1510年（永正7年）に没した定益のころからは、その動きをはっきりと追うことができます。彼は洞雲院を建立した人でもあります。久松氏は、大野にあった佐治氏や緒川の水野氏と、ときには対立し、ときには連合しながら、戦国の世を生き抜きました。特に有名なのは、信長の時代に水野忠政・信元と結んだ久松俊勝です。家康の生母於大の方が、後に俊勝のもとに嫁いできたことは、よく知られています。桶狭間の戦いの後、元康（後の家康）の三河統一に参加した俊勝は、上之郷城を攻め落とし西郡（現蒲郡市）の領主になりました。坂部城は長男信俊に譲りました。信俊は石山合戦出陣中に佐久間信盛のざん言により四天王寺で切腹、坂部城は佐久間軍に攻め落とされ、坂部城を本拠とする久松氏は滅びてしまいました。その後を受け継いだ信俊の弟たちの久松・松平家は家康のもとで活躍しました。

宮津には、柳審城によった新海氏があり、半田市の岩滑に出城をもっていたとも伝えられています。後に信元が新海氏を攻め、その領地を奪って岩滑城に中山勝時を入れたとする説もあるようです。草木の下竹林には信元の家臣竹内弥四郎の草木城があったといわれています。



洞雲院山門



於大方遺髪所



柳審城があつたといわれる秋葉山